

〔提 言〕

家族看護の役に立つ科学

東京大学大学院医学系研究科高齢者在宅長期ケア看護学分野

山本 則子

少子高齢化するわが国において、今後保健医療体制全体が大きく転換することが予想されます。医療では、医療技術の進歩と相まってこれまでの「治す医療」から「治し支える医療」へと進化しています。近年うたわれている「地域包括ケアシステム」の考え方のもとでは「医療は医療機関、保健は地域・職域」という従来の区分が成立しなくなっています。医療・看護・介護・世話といったケアの境目もあいまい化し、さらには、ケアは専門職や家族だけが担うものでもなくなり、地域社会の人々が多様な形でケアし合うことが求められるようになってきています。人々は、さまざまな場で、多様な医療・ケアを日常生活に組み込みながら長い人生を生き、人生の最終段階を迎えるようになってきているようです。

このような中で、看護学にも進化が求められます。「看護は人々の生活を支える専門職」と基礎看護学で教わりつつも、医療機関での実習が中心となった基礎教育の中で、これまで「回復過程を支える看護」のモデルが私たち看護職に優先的に染みついてきているように思われます。けれど、以上のようにヘルスケア全体が在宅化・地域化されてゆけば、これまでどうも看過されてきた感のある「生活を支える看護」のモデルを真の意味で実行できるかどうか改めて問われるときが来ていると感じます。

家族看護も同様に、看護において家族を対象に含めることは当然、基本的前提であるという指摘がある一方で、改めて家族看護が真の意味で実行されているかという点、課題はまだ大きいように思われます。「看護が生活を支える」というキーワードが地域化された医療のもとで改めて問い直され、そのために看護学教育の枠組み自体の見直しが始まっているのと同様に、「看護は家族全体を対象とする」というキーワードも改めて問い直し、看護学教育に意識的に組み込んでゆく必要があると思います。

効果的な教育のためには、その材料となる家族看護学の知の構築が必要です。家族看護を当然のこととする分、数値化以前に言語化・意識化も難しいのかもしれない。それを研究でどうやってすくいと上げてゆけるでしょう。従来の実証科学ももちろん大事ですが、それだけにとらわれず、科学のありかたそのものも問い直しながら研究を進める必要があると強く感じています。家族看護学が科学たりうるかを問うのではなく、家族看護の実践に役に立つ科学の方法を創造することこそが求められると思います。既存の枠組みを打破するような新たな家族看護学研究の登場、それを厳しく吟味しつつ世に産み出す学会の勇氣ある姿勢を、強く期待したいと思います。